1.「神保町」のイメージについて

宇崎竜童、三菱UFJ銀行神保町山中支店長と対談
～神保町について語る①～

司会：本日は神保町について熱く語っていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ではまず、神保町についてどのようなイメージをお持ちかについてお伺いします。

宇崎：おおざっぱに、神保町もお茶の水も駿河台も小川町も全部一緒なんだよね。いつからそんなに細かく分かれたか知らないけど、僕の在学中は全部ひっくるめて神田だった。全部神田神保町って呼んでたから、どこ行くのと言ったら神保町。なので神保町は古本屋さんの集まりの街っていう風に受け止めています。今でもこんなにたくさんの本屋さんたちが集まっていて、時刻表ばっかり扱っているようなコアな古本屋さんとか、そういう人たちが集まっている街って世界中見渡してもないんじゃないかなっていうぐらい珍しい街だと思う。昔は本屋さんの前に行列ができて、なかなか自分の番が回ってこなかったんだよ。みんな一つ一つのお店が小さいからね。昔は音楽や演劇についてちょっと調べたいなと思ったら、神保町っていう感じでしたね。65 年ぐらい前の話だからね。そんな今でも専門的だからこそ、生き残って、『古本の街』っていう風に残り続けてるっていう点はあると思う。どうしてそうなっていったのか、その経緯はちょっとわからない。だって何年も前の時刻表を買いに来るお客がいるってことが不思議じゃない？

司会：そうですね。

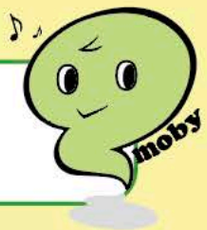
宇崎：それで成り立ってるっていうことも不思議だけど、よくわかんないからそれはもう古本屋さんのご主人や先代のご主人、先々代のご主人から聞かなきゃわからないようなこともきっと歴史的にあるんだろうな。

司会：ありがとうございます。では山中さんお伺いしてもよろしいでしょうか。

山中：私は大学が関西だったので、ずっと関西にいたんですね。この支店に来る前は新大阪の支店長をやってまして、そこから神保町に移る時に、「神保町に行くんです」と関西の方に言ったら 10 人に 1 人ぐらいしか神保町って聞いてもピンとこないんです。ほとんどがポカンとしてどこ行くのみたいな感じなんです。やはり宇崎さんのお話にもありましたが日本有数の古書店街でもあるので本を好きな方は、「あの古本の街ですね」となりますが、そうでない方も多いですからね。要は全国的な認知度が高くないんだなっていうのが、まず僕の第一印象でした。実際に神保町支店長として着任しましてやはりこれだけカルチャーとかコミュニティもいろいろある中で、あまり発信がなされてないのかなっていうのが率直な感想ですね。僕も東京の生活が長いんですけど、神保町にわざわざ休日に行くっていう人も、実は都内でも少ないんじゃないかなと思っています。一方ででも色々取り組みはされていらっしゃるじゃないですか。それで僕は神保町支店長になって、やはりこの街の魅力をもっと発信するべきだと考えています。昨年は街を知る活動の一環として、神保町支店のメンバーでレポートを作成しました。（神保町レポート 2025 を示す。）神保町が辿った歴史や周辺の武家屋敷、古本屋など様々なジャンルがあって、店主さんに出店の状況などをお聞きしてレポートを作ったんです。ではなぜ金融機関がこんなことやるのかというと、やはり私たち金融機関というのは非常に中立性の高い立場なので、その立場を生かして新たなプラットフォームをつくりその街をつなぐことで、活性化に貢献していきたいという考えでこのような活動をさせていただいています。

宇崎竜童、三菱UFJ銀行神保町山中支店長と対談
～神保町について語る②～

2. 再開発について



宇崎：銀行という中立な立場を生かして地域貢献に取り組んでおられるんですね。とすると銀行という立場上、再開発に対しても様々な依頼が来るかと思いますが、山中さんは再開発についてどのような考えをお持ちですか？

山中：そこはケースバイケースで一概には言えないというのが答えです。僕はこういう活動を始めた当初「銀行がなんでこんなことしてるんだ」「なんか裏があるんじゃないか」というような意見が多かったんです。で、今地域の有力者の方々とも意見交換する中で、「あの人は変な人じゃない」「地域の貢献に頑張っている人なんだよ」という考えが徐々に浸透しているというところです。

再開発も街並みが全く変わってしまうようなものであれば反対です。再開発は特に都内でもますます進んでいて、特に駿河台下に見えるあたりがまさに今進んでいるという状況だと思います。お茶の水は少し古い街並みが所々残っていたりして、混ざり合っているところが一つ魅力だと思うんです。そういった複合的な要素を保ちながらどのように街を展開していくのかは考えていかなくてはならないと思っています。

今千代田区が「神保町まちづくり協議会」を組織し、地域活性化に向けた基本構想を策定し活動しています。臨機応変に街を維持しながら、再開発についてのルールも決めているので、良い方向に進んでいくんじゃないかと銀行としては見ています。

司会：宇崎さんはいかがでしょうか

宇崎：残した方がいいなと思う街並みと新しくなってもいいなっていう街並みがあると思うな。例えば古書店の集まりなんて、パッと見は新しい街っていう感じはしないけど、それが好きだよっていう風に古本屋さんに入っていく人もいるだろうしね。そういう意味で言うと何が現代的かわからないけど、あれで風情を保ってるっていうことは多くあると思うんですね。楽器屋さんにしても、楽器を裸で表につるすお店もあります。「あ、その値段だもんね」っていうふうに僕たちは思うわけ。「一万円ぐらいだったら表にかけてもいいだろう」っていうのが楽器屋さんの気持ちだろうと思うんだけど、楽器を買いに行く人間としては、楽器を表に野晒しにする楽器屋さんから楽器買いたいと思わないんですよ。ただ初心者がそういうお店で楽器を買って演奏を始めるなら適したお店だといえる。再開発もそれと同じで、先ほど山中さんもおっしゃってたようにケースバイケースってことになると思っています。新しく建物が建ったとして、同じような店がテナントに入って、同じ料金で、同じアピールをしているだけじゃ人は来ないよね。だからなんかやんなきゃいけないと思うんだけど、何のために開発するのかとか納得できる理由で開発が進むといいと思う。

開発して大きなビルが立って、それでみんながいい思いするんだったら、開発したらいいと思うんだよね。まあ古臭い人間ですから、残してる方がいいのになと思うものを壊してまで 1 つの大きなビルにして、その中に今までその街の中にあった店をただ入れるだけじゃ、開発って言わないんじゃないかな。やっぱり生活する方とか利用する方の気持ちとかニーズを考えての開発っていうのが進んでいくと良いかなって思います。やっぱり大きなビルを作るって言ったら、当然銀行に相談がいくわけですよね。それで銀行はいい思いして、借りる方もいい思いができて出来上がった時にみんながそこ入ってよかったなって言えるものができればいいけど、みんながなんだか損しちゃったなっていうような気持ちになるような開発はしない方がいいと思うんだよ。

宇崎竜童、三菱UFJ銀行神保町山中支店長と対談 ～神保町について語る③～

3. 今後の神保町について

司会：ここまで神保町のイメージについてお伺いし、再開発についてのお二人のご意見も聞くことができましたが、改めて今後の神保町にどのようなことを期待されますか？まず宇崎さんからお願いします。

宇崎：神保町に期待してもできないことがいっぱいあるだろうと思うんですけど、例えば本を挙げると、今の若い世代はあまり本を読まないし老人でも読まない人は増えてる。でも本屋さんはやるべきことをやってると思うんだよね。だから店に入らない、見に行かない、買いに行かないっていう人の無関心が大きいんじゃないかと思います。とくに御茶ノ水は学生街なのに、本屋に入る学生は少ないと思ってます。もう一つ思うのは学生が御茶ノ水でバイトしたり、食事したり飲み会したりっていうことも多くないんじゃないかってことです。

司会：詳しくお伺いできますでしょうか。

宇崎：どっか違う街行くんだよね。だから遊ぶのも学ぶのも何もかもこの街でできることがあったら、この街に中でやればいいじゃんって僕らは思う。僕らが正しかったとは思わないけど、僕の学生時代は授業が終わったらクラブ活動やって、終わったら先輩たちは近くの麻雀屋へ行って。後輩たちは近くの安い飯屋に行って、飯食ったり居酒屋行って酒飲んだりしてる。今の学生さんは校舎出たらスーッと御茶ノ水駅に上がっていって、どっか違う土地へ行ってアルバイトする。それで神保町に何を期待しますかとか、どうしたらいいと思いますかってじじいに聞かれたってこうしたらいいって言えないよ。そういうことは、若い人が考えた方がいいんだよ。だから町づくり道場の人たちが考えた方がいいですよね。町づくり道場というのを作ったのは、現役の学生さんたちの自由な 4 年間で何か吸収してほしいと思ったからなんだよね。何やってもいいはずなんだよ。だから真面目に授業なんか出なくたっていいんだよ。だって授業で教わることよりもっと大事なことがこの街にあったりするかもしれないじゃん。

司会：山中さんはいかがでしょうか

山中：じゃあ神保町支店が目指す姿ということで、何をしたいかっていうと、やはりおしゃれなこの街で働き、学び、集う人々が誇りを持てるようにすることっていうのが、一番シンプルで大事なことだと思ってます。今宇崎さんがおっしゃられたことが、まさにそういうことだと思うんですよね。この街からどこか行くんじゃなくてここに集うような街、働いてる人もここで働くことに誇りを持てる。そんな街にしたいと思っています。じゃあ具体的にどういうことかというとやっぱり若い人たちがまた帰ってくるような街にしないといけないなと思ってます。当行の新入社員の中にもこのあたりの大学卒業の者が多いですが、聞いた限りではこの御茶ノ水で食事や飲み会はしないそうです。そこで今日学生さんにお聞きしたかったんですが、遊びに行くのに御茶ノ水ではないほかの場所にいくのはどういった理由があるんでしょうか。

司会：私はお茶の水は学生街ではあると思うんですけど、少し大人な街であり、上質なエンターテイメントに溢れた街だと思っています。それこそ古本屋や楽器店などは、少し上質なエンターテイメントだと思うんですよ。一方で、例えば渋谷であったり、新宿であったり、そういったところは大学生や高校生にこう刺さるようなエンターテインメントで溢れてる街なので、そちらに学生が行きがちだっていう傾向は、エンターテインメントの質の違いにあると思っています。まだ学生の楽しみたいニーズがお茶の水の街と合いきれてない部分っていうのがあるのかなとも考えています。

宇崎：うんじゃあね、若者は学生さんが好む店とか、そういうセンターを作れば学生はここにとどまるのかは疑問だし、そもそもどうしてそんな学生に媚びを売らなきゃいけないのかっていうのは思うところではあるよね。商売として、それをやれば成功するかもしれないけど、文化はなくなっていくよね。だったら渋谷行けばいいじゃんって話になっちゃうんだよね。卒業したら御茶ノ水に近づかないっていう学生さんたちのスタンスとか問題意識の薄さっていうのはあると思う。でもよく考えたら、ここで 3 年間 4 年間学生生活をしたおかげで、今の俺がいるんだってことをずいぶん経ってから思うわけですよ。でも卒業して神保町で勤めようかなって思う学生が今明大にどんだけいるかって言ったら、すごく少ないんじゃないかだと思うんですよね。じゃあなんで別の土地に行こうとするのか考えてみると、学生時代の自分を思い出したくないとか、こびりついてるものを捨てたいとか、違う自分になりたいとかいろんな理由があると思うんだけど、学生さんたちの将来に向かっていく志みたいなものが見えないのは確かかな。

司会：ありがとうございます。学生側の意識も大事だと思うので、私たちも考える立場として当事者意識を持ちたいと思います。山中さんはいかがでしょうか。

山中：宇崎さんもおっしゃる通り、学生時代に苦しい思いした人やまだ思い出したくないってっていう人もいるんだろうと思います。ただでも本当に僕も勉強になったのは、じゃあその人集めのために若者向けのエンターテイメントを置くのも確かに街づくりと相反する部分もあるんですよね。商業ありきでやれば人は来るかもしれないんですけど、その街の良さを維持しながら、どうしたら人が集まるような魅力がある街にできるかっていうのは、これは僕も同じように考えていかないといけないなと今日気づきましたね。

宇崎竜童、三菱UFJ銀行神保町山中支店長と対談
～神保町について語る④～

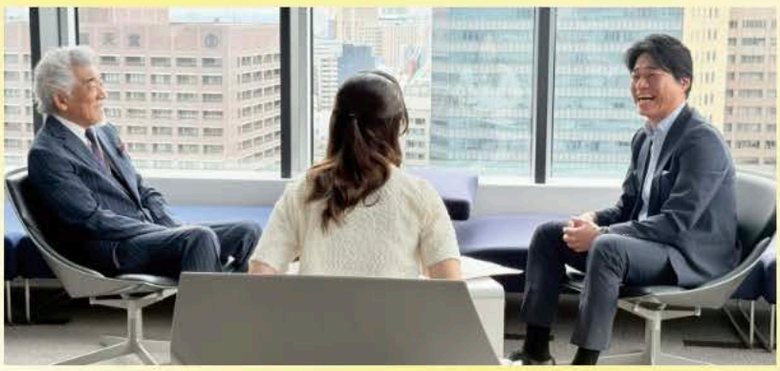
4. お気に入りのお店について

司会：では次にお気に入りの場所やお店をお伺いしたいと思います。私は 2 年前のキックオフミーティングで宇崎さんに食事に連れて行っていただいたキッチンカロリーがお気に入りでして、道場生ではない友達を連れていったこともあります。宇崎さんはいかがですか？

宇崎：もうなくなっちゃったんだけど、アミっていうイタリアン料理屋が印象に残ってます。学生時代に入ってたクラブの先輩後輩、同期がミーティングする場所だったんですよ。僕が町づくり道場を始めた頃はまだあったんだよ。そこへ OB が戻って、スパゲッティを「昔と変わらないね」って言いながら食べるのも結構楽しかったんですね。だからそういう意味で懐かしい店っていうものは残っててくれた方がいいなと思う。じゃあキッチンカロリーはお気に入りかよって言われても答えづらいですね。カロリーに関してはなんといってもあの親父が面白いから行ってるんだよ。親父が考えてることが面白いから、話しに行ってるわけでついでにそこで飯食ってるんだよね。お気に入りの店ってなると困るな。だからお気に入り方の問題だろうね。やっぱりこの街に戻ってきてるのはこの町のあの人、この店のあの人の面白さっていうのが理由だと思うんですよね。すっげえ癖がある人がいたり、なんか偏ってる人がいたり、いろんな人がいるからここへ来ると面白いなと思う。新興住宅みたいなとこ行くと面白い人 1 人もいないからね。僕が今住んでる家の周りって引っ越したばかりの時はお屋敷だらけだったんです。お屋敷の先代が亡くなると子どもたちは税金払えないから出て行っちゃうんですよ。そうするとそこに何ができるかってマンションができるわけだ。マンションの管理人さんたちとは仲良くなると話ができて面白いんですよ。でもそこに住んでる人とは喋らないからね。それだけ無機質になってっちゃうのは、すごく嫌だね。今の人って昔ほど近所付き合いをしたがらないし迷惑かもしれないでしょ。干渉されたくないでしょ。だから開発するってことは、干渉してくる人間がいなくなるっていうことでもあるし、興味を持ってももらえないし、こっちも興味を持たないで済むし、孤立しても部屋の中だけで生きてればなんとかなるっていう時代になってる。だからどうやって人とコミュニケーションを取るかってことが面白いっていうのは、最近思うところかな。例えば古書店なんかの親父は売ってる本の奥深いところまで頭の中に全部入ってるわけでしょ。だから掘り下げて聞いてったら面白い話をしてくれるんだよ。でもしねぇんだよみんな。そんな昔のことなんか興味ないんだもん。

司会：ありがとうございます。続いて山中さんのお気に入りのお店をお伺いしてもよろしいでしょうか

山中：私のお気に入りは新世界菜館という老舗の中華料理屋さんがですね。中華の名店がうちの支店の並びにあるんですけど、経営されていらっしゃる会長が地元で顔が広く、今までの歴史を教えていただいたり、神保町の有力者などいろんな人とつないでいただいたんですね。もちろん中華料理も美味しいんですけど、そういうお話をお伺いできたり、新しいつながりが生まれるのはありがたいです。実際にその方のおかげで活動が広がって地に足つくようになったというのもあって、料理とかお店じゃなくて、やっぱり人なんだなと思います。



宇崎竜童、三菱UFJ銀行神保町山中支店長と対談
～神保町について語る⑤～

5. 今後の目標について

司会：そうですね。山中さんから宇崎さんに何か聞いてみたいことはありますか。

山中：この対談でぜひお伺いしようと思っていたんですが、ミュージシャンである方が地域に興味関心を持たれて、学生の活動を応援したりっていうのは、結構意外でしたし、あまりそういう方はいらっしゃらないなっていうのは私は個人的に思っているんですけど、どういったきっかけだったんでしょうか。

宇崎：明治大学行って卒業したんですけど、大学に通っているうちに決まったことが 2 つあるんだよね。1 つは仕事、もう一つは結婚相手が見つかったんだよ。実は明大とお茶の水からちょっと離れたいっていう時期が 10 年ぐらいあったんですけど、それは違う自分になりたかったんですね。僕は明大中野出身なんですよ。中学から高校、それから大学までずっと先輩後輩が同じクラブ活動だったので 10 年間一緒だったんだよね。その中における自分のイメージとか、みんなが思ってる“宇崎竜童”っていう像をどっかに捨てたかったんだと思う。この人たちとずっといると僕はいつまでも中学 1 年の時の僕から逃げられないと思ったんで、こっから離れて自分で責任持ってなんかやりたいと思ってバンド持ってリーダーになって会社も作って社長になって全部責任を自分で持って。「昔の中学の私ではありません」とか、「ここで僕は変身したんです」っていうのを自分の中で証明したかったんですね。それからまた 10 年ぐらい経って、OB 会の同級生から「会長になってくんないかな？」って言われました。OB が集まらなくなってきちゃったからお前が OB 会の会長になって責任を持って人を集めてきてくれないかっていうわけ。だからそんなのだけやるために僕はお茶の水に来たくなかったと思ったけど、一応会長にはなったんです。だけどよく考えたら音楽家でやってくっていうことを決めたのも大学 4 年の時に明大の記念館講堂で決まったことだし、その時に嫁にしようと思う人に出会ったから、人生の中の一番大切な 2 つがこの校舎の中で決まったんだなっていうことに気づいてそれに対する恩返しをどうやったら返せるかなと考えるようになりました。お茶の水には音楽祭やカレー祭り、アートのイベントなどいろいろな催しがあるのでそこに学生さんたちを送り込んで、大人の人たちと協働できるような活動をさせたいということで、明大町づくり道場をつくりました。

山中：改めて道場ができた経緯であったり想いをお話しいただきましたけど、道場生のみなさんとして何かゴールは決めてらっしゃるんですか？なんとなく道場に属してるだけじゃないと思うんですよね。最終的にどうありたいとか卒業する前にこうしたいっていう思いをお持ちなんですねしょうか。

司会：私は町づくり道場全体としてこれまでつないでもらった縁に対して恩返しがしたいと思っています。宇崎さんが始めてくださったこの道場で、本当にたくさんの地域の方とご縁がつながっていると常々思っています。イベントなどに協力させていただく中で、つないでいただいた縁を縁に対して恩返しがしていきたいという気持ちがありまして、特に今年度三年生になって、代表になってより強く思うようになりました。今年はメンバーが多く集まったので今まで以上に精力的に活動をして、千代田区に住んでいる方、近隣に住んでいる方に御茶ノ水の魅力を再発見してもらいたいですし、イベントや私たちの活動を通じてこの街の良さを知っていただいて、例えばイベントの帰りに寄ったお店をすごく気に入っていただいて、またイベントがなくても来ていただいたりというような縁を繋げていけるような活動にしていけたらと考えています。

山中：地域への恩返しという想いで宇崎さんが立ち上げたわけですから、それの目標をぜひ実現してほしいです。やっぱり僕は魂・パッションが僕は大事だと思うので、僕も少なからず支店長という立場で、こういう活動をしっかり魂を込めてやらしてもらってる中で、何か一緒にできたらいいですね。

司会：そうですね。何か大きく活動ができたら嬉しいです。私たちも近くにいるので、ぜひご一緒したいです。宇崎さん、山中さんありがとうございました。

6. 学生に対して思うこと

宇崎：明大町づくり道場を作ってすぐのころの話なんだけど、男の子 2～3 人と女の子 4～5 人で飯を食いに行ったついでに若者向け風な服屋にみんなで入ったんだよ。フィッティングしようとしたら、袖がここまでしか入らなかったんですよ。僕そんな筋肉もりもりじゃないんですよ。誰相手に売ってんだよって店員に聞いたら、「いやえとそれは別に年齢は決めてませんけど主に学生さん向けなんです。」って言うんだ。少し飛躍するけど要するに草食男子というのは増えてはいると思います。そこにいた道場生の女の子に、「君たちはどういう男の子が好みなの？」って聞いたら全員草食系って言った。うわダメだね。僕はなんで女の子が草食系を好むのかわかんないんですよ。僕はよく飛行機でいろんな土地へツアーするんだけど自分は割と早めに座ってると後から乗ってくる人も見るじゃん。若い人がバーって入ってくるじゃん。もやしみたいな男の子が団体でいるわけ。てめえももやしだったのに今の若い人見るともっともやしなの。その後にアメリカ軍の兵隊が同じぐらいの年の兵隊がまあ武器はもちろん持ってないけど、制服着てたくましく歩いてくるんだよ。これは何やっても負けるわってやっぱ思うわ。でも大谷翔平みたいな人が出てくるわけじゃないですか。だから本当は捨てたもんじゃない日本なんですよ。なのになんで女の子は草食系がいいっていうのか。そういうもの全部含めて学生さんたちは何か考えてんだろうっていつも思うんだよね。パワハラするなとかいろいろ難しい時代なんだけど、やっぱり厳しく育てなきゃいけない時代でもあると思いますよ。例えば今の話を町づくり道場の中だけで喋ってごらん。「どんなイメージを持ってますか？」ってみんなに聞いてみてほしい。答えがないやつがいたり、別に考えたくないですとかいろんな人がいると思うんだよね。だからさっきも言った気がするけど若い人たち自身で将来への活力を見出すためにも、君たち若者たちの中でそういう討論した方がいいと思うな。

※司会は、町づくり道場代表の相宮さん。